

有 有
島 島
生 武
馬 郎
集 集

改
造
社
版

杉浦非水装幀

昭和二年七月一日印刷
昭和二年七月五日發行

現代日本文學全集 第二十七篇

著者 有島武郎
著者 有島生馬

發行者 山本美

東京市麹町區內幸町一丁目參番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二



發兌

東京市麹町區內幸町一丁目參番地
幸ビルデイング

改造社

振替 東京 〇五七四
電話 銀座 四六八二
銀座座 番番番

「有島武郎集」目次

卷頭寫眞（照影・筆蹟）

小傳

有島生馬……………四

小 さ さ 者 へ……………五

カ イ ン の 末 裔……………一三

生 れ 出 づ る 惱 み……………三七

ク ラ ラ の 出 家……………七三

或 る 女……………八三

ド モ 又 の 死……………一三〇

惜 み な く 愛 は 奪 ふ……………三四三

著 作 年 表

三九九

「有島武郎集」の後に

織田正信……………四〇四

「有島生馬集」目次

卷頭寫眞（照影）

小序（筆蹟）

鳩飼ふ娘……………四〇九

美少年……………四一五

獅子ウブラジンとエレル老人……………四二六

眞晝の出来事……………四三七

嘘の果……………四四九

年譜……………五三三

有島武郎集

有島武郎小傳

兄は明治十一年三月四日、小石川區水道町の貸家^{かや}で生れた。當時父武は三十六歳、大藏省書記官^{しき}を勤めてゐたが、生れは薩摩川内北郷家の家臣であつた。母幸子も南部藩々士の娘だつたが、祖父が江戸表留守居役をしてゐたので、十歳までは都で育つた。兎も角二人は南と北の果から出て、新帝都に新時代の生計を営む努力を初めたのである。

同十五年父が横濱税關長に轉任し、十年間の官邸生活が続いた。その間兄は長官の長男たる故と天稟の徳望とで、衆童から小さい王子のやうな待遇を受けてゐた。父は兄を米國人の家庭や學校へ送り、専ら英語を學ばしめた。十歳から虎門學習院へ寄宿せしめた。一體父は子供の教育に就いては自由放任であつたが、兄だけは例外だつたと云はれてゐる。然し兄の性格等に就いては言葉^{ことば}を極めて常に賞揚してゐた。中學時代は溫良聰明な模範的學生の一人だつた。皇太子殿下の御相手に選ばれた一事でもそれは知られる。

二十九年學習院中等科を卒業、札幌農學校へ入學、新渡戸博士の家に寄寓してゐた。かく兄

は幼少の頃から家を出、多くは人なかなで成人する運命を持つてゐた。

札幌に於ける五年間の大自然の感化と素朴勤勉な學風とは彼に學問と徳性と信仰とを賦與した。かくて學習院時代の貴族的物質的な教養を脱し、身心鍛鍊向上の機會を得た。初め禪に參し、後内村鑑三氏等の感化から基督教に入つた。森本氏と共に「リヴィングストン傳」は即ち當時の信仰の所産である。

三十四年鎌倉幕府初代の農政を残して卒業し、兩親の膝下に歸つたが、席温まる間なく、志願兵として入營、越えて三十六年米國へ渡り、ハアゲアフォードでマスター・オブ・アーツを授けられた。その夏はフランクフォルト精神病院に至り、狂人の看護をした。その頃から明かに基督教に對し、專攻の歴史經濟に對し懷疑的となり、文學及び社會主義、唯物史觀等に興味を抱くやうになつた。ハーヴァードに遊ぶやうになつて、益々その傾向は顯著になつた。

三十九年の夏、私は米國から渡航して來た兄をナボリの埠頭に迎へた、兄はまだ文學者たる具體的の道を見出してゐなかつたが、既に專攻の學問には全然興味を失つて終つてゐた。ロンドンでクロボトキンに會つた兄は翌年の四月

久々で故郷へ歸り、その十二月から東北帝國大學の教師として赴任した。

四十二年神尾光臣の二女安子と結婚した、三十二歳である。四十四年以後次々／＼に行光、敏行、行三の三男が生れた。然し嫂は程なく健康を害したので、兄も職を辭し東京下六番町の本宅へ歸つて來た。安子の病勢は思ふやうに恢復しなかつた、同棲八年大正五年八月平塚の杏雲堂病院に入院した。兄は最上の努力を盡し自ら看護にあたつた。兄は十二月父も亦歿した。兄の平安無事だつた生活は一轉し、重荷と煩累とが急にのしかゝつて來た。

結婚の翌年、白権が發行された。同人は悉く吾等兄弟三人の舊友であつた。その關係上兄も執筆し、四十四年一月から長篇或る女が掲載され出した。それ以後の十三年間は文壇人として、讀者の記憶にまだ新なことと思ふ。大正十二年春、財産及び農場の讓與を公言し、その六月八日午後三時頃母及び姉に挨拶して家を出た。吾々は今日まで空しく兄の歸宅を待つた。時に四十六歳。今日生存してゐれば丁度五十歳になる。

昭和二年六月八日

有島生馬

小 き き 著 へ

お前たちが大きくなつて、一人前の人間に育ち上つた時、その時までお前たちの父は生きてゐるか否か、それは分らない事だが父の書き残したものを繰り擧げて見る機会があるだらうと思ふ。その時この小さな書き物もお前たちの目の前に現はれ出るだらう。時はどん／＼移つて行く。お前たちの父なる私がその時お前たちにどう映るか、それは想像も出来ない事だ。恐らく私が今こゝで、過ぎ去らうとする時代を噛み齧れんでゐるやうに、お前たちも私の古臭い心持を噛み齧れむのかも知れない。私はお前たちの爲めにさうあらん事を祈つてゐる。お前たちは遠慮なく私を踏臺にして、高い遠い所に私を乗り越えて進まなければ間違つてゐるのだ。然しながらお前たちをどんなに深く愛したものがこの世にゐるか、或はゐたかといふ事實は、永久にお前たちに必要なものだと私は思ふのだ。お前たちがこの書き物を読んで、私の思想の未熟で頑固なのを噛み間に、私達の愛はお前たちを暖め、慰め、勵ま

し、人生の可能性をお前たちの心に味覺させずにおかないと私は思つてゐる。だからこの書き物を私はお前たちにあてて書く。

お前たちは去年一人の、たつた一人のマ、を永久に失つてしまつた。お前たちは生れると間もなく、生命に一番大事な養分を奪はれてしまつたのだ。お前達の人生はそこで既に暗い。この間ある雑誌社が「私の母」といふ小さな感想をかけたといつて來た時、私は何んの氣もなく「自分の幸福は母が始めから一人で今も生きてゐる事だ」と書いてのけた。而して私の萬年筆がそれを書き終へるか終へないに、私はすぐお前たちの事を思つた。私の心は悪事でも働いたやうに痛かつた。しかも事實は事實だ。私はその點で幸福だつた。お前たちは不幸だ。恢復の途なく不幸だ。不幸なものたちよ。晩方の三時からゆるい陣痛が起り出して不安が家中に擴がつたのは今から思ふと七年前の事だ。それは吹雪も吹雪、北海道ですら、滅多にはないひどい吹雪の日だつた。市街を離れた川

沿ひの一つ家はけし飛ぶ程揺れ動いて、窓硝子に吹きつけられた粉雪は、さらぬだに綿雲に閉ぢられた陽の光を二重に遮つて、夜の暗さがいつまでも部屋から退かなかつた。電燈の消えた薄暗い中で、白いものに包まれたお前たちの母上は、夢心地に呻き苦しんだ。私は一人の學生と一人の女中とに手傳はれながら、火を起したり、湯を沸かしたり、便を走らせたりした。産婆が雪で眞白になつてころけこんで來た時は、家中のものが思はずはつと息氣をついて安堵したが、書になつても書過ぎになつても、出産の模様がみえないで、産婆や看護婦の顔に、私だけに見える氣遣ひの色が見え出すと、私は全く慌ててしまつてゐた。書齋に閉ぢ籠つて結果を待つてゐられなくなつた。私は産室に降りていつて、産婦の両手をしっかりと握る役目をした。陣痛が起る度に産婆は叱るやうに産婦を勵まして、一分も早く産を終らせようとした。然し暫らくの苦痛の後に、産婦はすぐ又深い眠りに落ちてしまつた。斯くしかいて安々と何事も忘れたやうに見えた。産婆も、後から駆けつけてくれた醫者も、顔を見合はして吐息をつくばかりだつた。醫師は昏睡が来る度に何かに非常の手段を用ひようかと案じてゐるらしかつた。

畫過ぎになると戸外の吹雪は段々鎮まつて、濃い雪雲から漏れる薄日の光が、窓にたまつた雪に來てそつと戯れるまでになつた。然し産室の中の人々にはますます重い不安の雲が蔽ひ被さつた。醫師は醫師で、産婆は産婆で、私は私で、銘々の不安に捕はれてしまつた。その中で何等の危害をも感ぜぬらしく見えるのは、一番恐ろしい運命の淵に臨んでゐる産婦と胎兒だけだつた。二つの生命は昏々として死の方へ眠つて行つた。

丁度三時と思はしに——産氣がついてから十二時間目に——夕べを催す光の中で、最後と思はしい激しい陣痛が起つた。肉の眼で恐ろしい夢でも見るやうに、産婦はかつと臉を開いて、あてどもなく一所を睨みながら、苦しけといふよりは恐ろしげに顔をゆがめた。而して私の上體を自分の胸の上にたくし込んで、背を羽がいに抱きすくめた。若し私が産婦と同じ程度にいきんでゐなかつたら、産婦の腕は私の胸を押しつぶすだらうと思ふ程だつた。そこにある人々の心は思はず總立ちになつた。醫師と産婆は場所を忘れたやうに大きな聲で産婦を勵ました。

ふと産婦の握力がゆるんだのを感じて私は

顔を舉げて見た。産婆の膝許には血の氣のない嬰兒が仰向けに横たへられてゐた。産婆は膝でもつくやうにその胸をはげしく敲きながら、葡萄酒々々といつてゐた。看護婦がそれを持つて來た。産婆は顔と言葉とでその酒を盥の中にあけると命じた。激しい芳香と同時に熱の湯は血のやうな色に變つた。嬰兒はその中に浸された。暫らくしてかすかな産聲が息氣もつけない緊張の沈黙を破つて細く響いた。

大きな天と地との間に一人の母と一人の子とがその刹那に忽如として現はれ出たのだ。

その時新たな母は私を見て弱々しくほゝんだ。私はそれを見たと何んといふ事なしに涙が眼がしらに滲み出て來た。それを私はお前たちに何んといつていひ現はすべきを知らない。私の生命全體が涙を私の眼から押し出したとでもいへばいゝかも知らん。その時から生活の諸相が凡て眼の前で變つてしまつた。

お前たちの中最最初にこの世の光を見たものは、このやうにして世の光を見た。二番目も三番目も、生れやうに難易の差こそあれ、父と母とに與へた不思議な印象に變りはない。かうして若い夫婦はつぎ／＼にお前たち三人の親となつた。

私はその頃心の中に色々な問題をあり餘る程持つてゐた。而して始終醜麗しながら何一つ自分を満足に近づけるやうな仕事をしてゐなかつた。何事も獨りで嚙みしめて見る私の性質として、表面には十人並みな生活を生活してゐながら、私の心はやゝとすると突き上げて來る不安にいら／＼させられた。ある時は結婚を悔いた。ある時はお前たちの誕生を望んだ。何故自分の生活の旗色をもつと鮮明にしない中に結婚などをしたか。妻のある爲めに後ろに引きずつて行かれねばならぬ重みの幾つかを、何故好んで腰につけたのか。何故二人の肉慾の結果を天からの賜物のやうに思はねばならぬのか。家庭の建立に費す勞力と精力とを自分は他に用ひべきではなかつたのか。

私は自分の心の亂れからお前たちの母上を屢々泣かせたり淋しがらせた。またお前たちを沒義道に取りあつかつた。お前達か少し執念く泣いたりいがんだりする聲を聞くと、私は何か殘虐な事をしないではゐられなかつた。原稿紙にでも向つてゐた時に、お前たちの母上が、小さな家事上の相談を持つて來たり、お前たちが泣き騒いだりしたりすると、私は思はず机をた／＼立て上つたりした。而して後では

たまらない淋しさに襲はれるのを知りぬいてゐながら、激しい言葉を遣つたり、厳しい折檻をお前たちに加へたりした。

然し運命が私の我儘と無理解とを罰する時が来た。どうしてもお前達を子守に任せておけないで、毎晩お前たち三人を自分の枕許や、左右に臥らして、夜通し一人を寝かしつけたり、一人に牛乳を温めてあてがつたり、一人に小用をさせたりして、碌々熟睡する暇もなく愛の限りを盡したお前たちの母上が、四十一度といふ恐ろしい熱を出してどつと床についた時の驚きもさる事ではあるが、診察に来てくれた二人の醫師が口を揃へて、結核の徴候があるといつた時には、私は唯々譯もなく青くなつてしまつた。検査の結果は醫師たちの鑑定を裏書きしてしまつた。而して四つと三つと二つになるお前たちを残して、十月末の淋しい秋の日に、母上は入院せねばならぬ體となつてしまつた。

私は日中の仕事を終ると飛んで家に歸つた。而してお前達の一人か二人を連れて病院に急いだ。私がその町に住まひ始めた頃働いてゐた吉明な門徒の婆さんが病室の世話をしてゐた。その婆さんはお前たちの姿を見ると隠し隠し涙を拭いた。お前たちは母上を寢臺の上に

見つけると飛んでいつてかじり附かうとした。結核症であるのをまだあかされてゐないお前たちの母上は、實を抱きかへるやうにお前たちをその胸に集めようとした。私はいゝ加減にあしらつてお前たちを寢臺に近づけないやうにしなればならなかつた。忠義をしようとしながら、周囲の人から極端な誤解を受けて、それを精解してならない事情に置かれた人の味ひさうな心持を幾度も味つた。それでも私はもう怒る勇氣はなかつた。引きはなすやうにしてお前たちを母上から遠ざけて歸路につく時には、大抵街燈の光が淡く道路を照してゐた。玄關を這入ると雇人だけが留守してゐた。彼等には二三人もゐる癖に、残しておいた赤坊のおしめを代へようとしなかつた。氣持ち悪けに泣き叫ぶ赤坊の股の下はよくぐしょ濡れになつてゐた。

お前たちは不思議に他人になつかない子供たちだつた。やう／＼お前たちを寝かしつけてから私はそつと書齋に這入つて調べ物をした。體は疲れて頭は興奮してゐた。仕事をすまして寢つかうとする十一時前後になると、神經の過敏になつたお前たちは、夢などを見ておびえながら眼をさますのだつた。曉方になるとお前たち

の一人は乳を求めて泣き出した。それにおこされると私の眼はもう朝まで閉ぢなかつた。朝飯を食ふと私は赤い眼をしながら、堅い心のやうなものの出来た頭を抱へて仕事をする所に出懸けた。

北國には冬が見る／＼逼つて来た。ある時病院を訪れると、お前たちの母上は寢臺の上に起きかへつて窓の外を眺めてゐたが、私の顔を見ると、早く退院がしたいといひ出した。窓の外の楓があんなになつたのを見ると心細いといふのだ。成るほど入院したてには燃えるやうに枝を飾つてゐたその葉が一枚も残らず散りつくして、花壇の菊も霜に傷められて、萎れる時でもないのに萎れてゐた。私はこの寂しさを毎日見せておくだけでもいけないと思つた。然し母上の本當の心持はそんな所にはなかつて、お前たちから一刻も離れてゐられなくなつてゐただ。

今日いよく退院するといふ日は、霜の降る、寒い風のびゅう／＼と吹く悪い日だつたから、私は思ひ止らせようとして、仕事をすますとすぐ病院に行つて見た。然し病室はからつぽで、例の婆さんが、買ったものやら、座蒲團やら、茶器やらを部屋の間でござ／＼と始末してゐた。

急いで家に歸つて見ると、お前たちはもう母上のまはりには集まつて嬉しうに騒いでゐた。私はそれを見ると涙がこぼれた。

知らない間に私たちは離れられないものになつてしまつてゐたのだ。五人の親子はどん／＼押し寄せて来る寒さの前に、小さく固まつて身を護らうとする雑草の株のやうに、互により添つて暖みをつか合はうとしてゐたのだ。然し北國の寒さは私たち四人の暖みでは間に合はない程寒かつた。私は一人の病人と頑でないお前たちとを勞はりながら旅籠のやうに南を指して通れなければならなくなつた。

それは初雪のどん／＼降りしきる夜の事だつた、お前たち三人を生んで育ててくれた土地を後にして旅に上つたのは。忘れる事の出来ないいくつかの顔は、暗い停車場のプラットフォームから私たちに名残を惜しんだ。陰鬱な津輕海峡の海の色も後ろになつた。東京までついて來てくれた人の學生は、お前たちの中の一歩小さい者を、母のやうに終夜抱き通してゐてくれた。そんな事を書けば限りがない。兎も角私たちは幸に怪我もなく、二日の物憂い旅の後、晩秋の東京に着いた。

今までの所とちがつて、東京には澤山の

親類や兄弟がゐて、私たちの爲めに深い同情を寄せてくれた。それは私にどれ程の力だつたらう。お前たちの母上は程なく下海岸にさゝやかな食別荘を借りて住む事になり、私たちは近所の旅館に宿を取つて、そこから見舞ひに通つた。一時は病勢が非常に衰へたやうに見えた。お前たちと母上と私とは海岸の砂丘に行つて日向ぼつこをして楽しく二三時間を過ごすまでになつた。

どういふ積りで運命がそんな小隙を私たちに與へたのかそれは分らない。然し彼れはどんな事があつても仕遂ぐべき事を仕遂げずにはおかなかつた。その年が暮れに迫つた頃お前達の母上は假初の風邪から／＼悪い方へ向いて行つた。而してお前たちの中の一人も突然原因の解らない高熱に侵された。その病氣の事を私は母上に知らせるのに忍びなかつた。病児は病児で私を暫らくも手放さうとはしなかつた。

お前達の母上からは私の無沙汰を書めて來た。私は遂に倒れた。病児と枕を並べて、今まで経験した事のない高熱の爲めに呻き苦しまねばならなかつた。私の仕事？ 私の仕事は私から千里も遠くに離れてしまつた。それでも私はもう私を悔やまうとはしなかつた。お前たちの爲

めに最後まで戦はうとする熱意が病然よりも高く私の胸の中で燃えてゐるのみだつた。

正月早々悲劇の絶頂が到來した。お前たちの母上は自分の病氣の眞相を明かされねばならぬ破目になつた。そのむづかしい役目を勤めてくれた醫師が歸つて後の、お前たちの母上の顔を見た私の記憶は一生涯私を驅り立てるだらう。眞蒼な清々しい顔をして枕についたまま母上には冷たい覺悟を微笑に云はして靜かに私を見た。そこには死に對する resignation と共に、お前たちに對する根強い執着がまぎ／＼と刻まれてゐた。それは物凄くさへあつた。私は凄慘な感じに打たれて思はず眼を伏せてしまつた。

愈々日海岸の病院に入院する日が來た。お前たちの母上は全快しない限りは死ぬともお前たちに逢はない覺悟の脚を堅めてゐた。二度とは着ないと思はれる——而して實際着なかつた——着を着て座を立つた母上は内外の母親の眼の前でさめ／＼と泣き崩れた。女ながら氣性の勝れて強いお前たちの母上は、私と二人だけゐる場合でも泣顔などは見せた事がないといつてもいい位だつたのに、その時の涙は拭くあとからあとから流れ落ちた。その熱い涙は

お前たちだけの尊い所有物だ。それは今は乾いてしまった。大空を互る雲の一片となつてゐるか、谷河の水の一滴となつてゐるか、大洋の泡の一つとなつてゐるか、又は思ひがけない人の涙堂に貯へられてゐるか、それは知らない。然しその熱い涙は兎も角もお前たちだけの尊い所有物なのだ。

自動車のある所に来ると、お前たちの中熱病の豫後にある一人は、足の立たない爲めに下女に背負はれて、——一人はよち／＼と歩いて、

——一番末の子は母上を苦しめ過ぎるだらうといふ祖父母たちの心遣ひから連れて來られなかつた——母上を見送りに出て來てゐた。お前たちの頑足ない、驚きの眼は、大きな自動車にばかり向けられてゐた。お前たちの母上は淋しくそれを見やつてゐた。自動車が動き出すとお前達は女中に勧められて兵隊のやうに舉手の禮をした。母上は笑つて軽く頭を下げてゐた。お前たちは母上がその瞬間から永久にお前たちを離れてしまふとは思はなかつたらう。不幸なものたちよ。

それからお前たちの母上が最後の息氣を引きたるまでの一年と七箇月の間、私たちの間には烈しい戦が闘はれた。母上は死に對して最

上の態度を取る爲めに、お前たちに最大の愛を遺すために、私を加減なしに理解する爲めに、私は母上を病魔から救ふ爲めに、自分に迫る運命を男らしく肩に擔ひ上げるために、お前たちは不思議な運命から自分を解放するために、身にふさはない境遇の中に自分をはめ込むために、闘つた。血まぶれになつて闘つたといつていい。私も母上もお前たちも幾度弾丸を受け、刀創を受け、倒れ、起き上り、又倒れたらう。

お前たちが六つと五つと四つになつた年の八月の二日に死が殺到した。死が凡てを壓倒した。而して死が凡てを救つた。

お前たちの母上の遺言書の中で一番崇高な部分ははお前たちに與へられた一節だつた。若しこの書き物を読む時があつたら、同時に母上の遺書も讀んで見るがいい。母上は血の涙を泣きながら、死んでもお前たちに會はない決心を、饑へさなかつた。それは病菌をお前たちに傳へるのを恐れたばかりではない。又お前たちを見る事によつて自分の心の破れるのを恐れただけではない。お前たちの清い心に残酷な死の姿を見せて、お前たちの一生をいやが上に暗くする事を恐れ、お前たちの伸び伸びで行かなければ

ならぬ靈魂に少しでも大きな傷を残す事を恐れたのだ。幼兒に死を知らせる事は無益であるばかりでなく有害だ。葬式の時は女中をお前たちにつけて楽しく一日を過ごさして貰ひたい。さうお前たちの母上は書いてゐる。

「子を思ふ親の心は日の光世より世を照る大さきに似て」

とも詠じてゐる。
母上が亡くなつた時、お前たちは丁度信州の山の上にゐた。若しお前たちの母上の臨終にあはせなかつたら一生恨みに思ふだらうとさへ書いてよこしてくれたお前たちの叔父上に強ひて頼んで、お前たちを山から歸らせなかつた私をお前たちが殘酷だと思ふ時があるかも知れない。今十一時半だ。この書き物を草してゐる部屋の隣りにお前たちは枕を列べて寝てゐるのだ。お前たちはまだ小さい。お前たちが私の歸になつたら私のした事を、即ち母上のさせようとした事を償高く見る時が來るだらう。

私はこの間にどんな道を通つて來たらう。お前たちの母上の死によつて、私は自分の生きて行くべき大道にさまよひ出た。私は自分を愛護してその道を踏み迷はずに通つて行けばいいのを知るやうになつた。私は嘗て一つの創作の

中に妻を犠牲にする決心をした一人の男の事を書いた。事實に於てお前たちの母上は私の爲めに犠牲になつてくれた。私のやうに持ち合はした力の使ひやうを知らなかつた人間はない。私の周囲のものは私を一個の小心な魯鈍な、仕事の出来ない、構れむべき男と見る外を知らなかつた。私の小心と魯鈍と無能力とを徹底さして見ようとしてくれるものはなかつた。それをお前たちの母上は成就してくれた。私は自分の弱さに力を感じ始めた。私は仕事の出来ない所に仕事を找出した。大膽になれない所に大膽を找出した。鋭敏でない所に鋭敏を找出した。言葉を換へていへば、私は鋭敏に自分の魯鈍を見貫き、大膽に自分の小心を認め、勞役して自分の無能力を體驗した。私はこの力を以て己れを鞭打ち他を生きる事が出来るやうに思ふ。お前たちが私の過去を眺めて見るやうな事があつたら、私も無駄には生きなかつたのを知つて喜んでくれるだらう。

雨などが降りくらして悵鬱な気分が家の中に漲る日などに、どうかするとお前たちの一人が黙つて私の書齋に這入つて来る。而して一言バ、といったぎりで、私の膝によりかゝつたまましく、と泣き出してしまふ。あゝ何がお前

たちの頑強はない眼に涙を要求するのだ。不幸なものたちよ。お前たちが謂れもない悲しみにくづれるのを見るに増して、此の世を淋しく思はせるものはない。またお前たちが元氣よく私の朝の挨拶をしてから、母上の寫眞の前に駈けて行つて、「マ、ちゃん御機嫌よう」と快活に叫ぶ瞬間ほど、私の心の底までぐさと刮り通す瞬間はない。私はそのとき、きよつとして無助の世界を眼前に見る。

世の中の人々は私の迷懷を馬鹿々々しいと思ふに違ひない。何故なら妻の死とはそこにもここにも厭きはてる程夥しくある事柄の一つに過ぎないからだ。そんな事を重大視する程世の中の人々は閑散でない。それは確かにさうだ。然しそれにもかゝらず、私といはず、お前たちも行く／＼は母上の死を何物にも代へがたく悲しく口惜しいものに思ふ時が来るのだ。世の中の人々が無頓着だといつてそれを恥ぢてはならない。それは恥ぢべきことぢやない。私たちはそのありうちの事柄の中からも人生の淋しさに深くづつかつて見ることが出来る。小さなことが小さなことでない。大きなことが大きなことでない。それは心一つだ。

何しろお前たちは見るに痛ましい人生の芽生

えだ。泣くにつけ、笑ふにつけ、面白がるにつけ、淋しがるにつけ、お前たちを見守る父の心は痛ましく傷つく。

然しこの悲しみがお前たちと私とにどれ程の強みであるかをお前たちはまだ知るまい。私たちはこの損失のお蔭で生活に一段と深入りしたのだ。私共の根はいくらかでも大地に延びたのだ。人生を生きる以上人生に深入りしないものは災ひである。

同時に私たちは自分の悲しみにばかり浸つてゐてはならない。お前たちの母上は亡くなるまで、金銭の累ひからは自由だつた。飲みたい薬は何んでも飲む事が出来た。食ひたい食物は何んでも食ふ事が出来た。私たちは偶然な社會組織の結果からこの特權ならざる特權を享受した。お前たちのあるものはかすかながらU氏一家の模様を覚えてゐるだらう。死んだ細君から結核を傳へられたU氏があの理智的な性情を有しながら、天理教を信じて、その御祈禱で病氣を癒さうとしたその心持を考へると、私はたまらなくなる。薬がきくものか祈禱がきくものかそれは知らない。然しU氏は醫者の薬が飲みたかつたのだ。然しそれが出来なかつたのだ。U氏は毎日下血しながら役所に通つた。ハ

ンケチを空しく通しな喉からは皺喰れた聲しか出なかつた。働けば病氣が重なる事は知れ切つてゐた。それを知りながらU氏は御祈禱を頼みにして、老母と二人の子供との生活を續けるために、勇ましく飽くまで働いた。而して病氣が重つてから、なけなしの金を出して貰つた古賀液の注射は、田舎の醫師の不注意から静脈を外れて、激烈な熱を引き起した。而してU氏は無資産の老母と幼兒とを後に残してその爲めに斃れてしまつた。その人たちは私たちの隣りに住んでゐたのだ。何んといふ運命の皮肉だ。お前たちは母上の死を思ひ出すと共に、U氏を思ひ出すことを忘れてはならない。而してこの恐ろしい溝を埋める工夫をしなければならぬ。お前たちの母上の死はお前たちの愛をそこまで擱けさすに十分だと思ふから私はいふのだ。

十分人世は淋しい。私たちは唯さういつて澄してゐる事が出来るだらうか。お前たちと私とは、血を味つた歌のやうに、愛を味つた。行かう、而して出来るだけ私たちの周囲を淋しさから救ふために働かう。私はお前たちを愛した。而して永遠に愛する。それはお前たちから親としての報酬を受けるためにいふのではない。お前たちを愛する事を教へてくれたお前たちに私の要求するものはたゞ私の感謝を受取つて貰ひたいといふ事だけだ。お前たちが一人前に育ち上つた時、私は死んでゐるかも知れない。一生懸命に働いてゐるかも知れない。老衰して物の役に立たないやうになつてゐるかも知れない。然し何れの場合にしろ、お前たちの助けなければならぬものは私ではない。お前たちの若々しい力は既に下り坂に向はうとする私などに煩はされてゐてはならない。斃れた親を喰ひ盡して力を貯へる獅子の子のやうに、力強く勇ましく私を振り捨てて人生に乗り出して行くがいゝ。

今時計は夜中を過ぎて一時十五分を指してゐる。しんと静まつた夜の沈黙の中にお前たちの平和な寝息だけが幽かにこの部屋に聞こえて来る。私の眼の前にはお前たちの叔母が母上にとて贈られた薔薇の花が寫眞の前に置かれてゐる。それにつけて思ひ出すのは私があゝの寫眞を撮つてやつた時だ。その時お前たちの中に一番年だけたものが母上の胎に宿つてゐた。母上は自分でも分らない不思議な望みと恐れとで始終心をなやましてゐた。その頃の母上は殊に美しかった。希臘の母の眞似だといつて、部屋の中にいゝ肖像を飾つてゐた。その中にミネルヴァの像や、ゲーテや、クロムウェルや、ナイティンゲール女史やの肖像があつた。その少女じみた野心をその時の私は軽い皮肉の心で観てゐたが、今から思ふとたゞ笑ひ捨てしまふことはどうしても出来ない。私がお前たちの母上の寫眞を撮つてやらうといつたら、思ふ存分化粧をして一番の晴着を着て、私の二階の書齋に這入つて来た。私は寧ろ驚いてその姿を眺めた。母上は淋しく笑つて私にいつた。産は女の出陣だ。いゝ子を生むか死ぬか、そのどつちかだから死際の装ひをしたのだ。——その時も私は心なく笑つてしまつた。然し、今はそれも笑つてはゐられない。

お前たちは私の足跡に不純な何物をも見出し
得ないだけの事はする。屹度する。お前たちは
私の斃れた所から新らしく歩み出さねばなら
ないのだ。然しどちらの方向にどう歩まねばな
らぬかは、かすかながらにもお前達は私の足跡
から探し出す事が出来るだらう。
小さき者よ。不幸な而して同時に幸福なお前
たちの父と母との祝福を胸にしめて人の世の旅
に登れ。前途は遠い。而して暗い。然し恐れて
はならぬ。恐れない者の前に道は開ける。
行け。勇んで。小さき者よ。

(一九一八年一月、新潮所掲)

カインの末裔

長い影を地にひいて、瘦馬の手綱を取りながら、彼は黙りこくつて歩いた。大きな汚い風呂敷包みと一緒に、章魚のやうに頭ばかり大きい赤坊をおぶつた彼の妻は、少し跛脚をひきながら三四間も離れてその跡からとぼ／＼と歩いて行つた。

北海道の冬は空まで通つてゐた。蝦夷富士と云はれるマツカリヌプリの麓に續く膽振の大草原を、日本海から内浦灣に吹きぬける西風が、打寄せる村濤のやうに跡から跡から吹き拂つて行つた。寒い風だ。見上げると八合目まで雪になつたマツカリヌプリは少し頭を前にこぎめて風に初向ひながら黙つたまゝ突つ立つて居た。昆布岳の斜面に小さく集まつた雲の塊を眼がけて日は沈みかゝつてゐた。草原の上には一本の樹木も生えてゐなかつた。心細い程眞直な一筋道を、彼れと彼の妻だけが、よろ／＼と歩く二本の立木のやうに動いて行つた。

二人は言葉を忘れた人のやうにいつまでも黙つて歩いた。馬が溺りをする時だけ彼れは不承に立ちどまつた。妻はその暇にやうやく追ひついて背の荷をゆすり上げながら溜息をついた。馬が溺りをすまずと二人は又黙つて歩き出した。

「こゝろおやち熊の事が出るづら」

四里にわたるこの草原の上で、たつた一度妻はこれ丈の事を云つた。慣れたものには時刻と云ひ、所柄と云ひ、熊の襲來を恐れる理由があつた。彼れはいま／＼しきうに草の中に唾を吐き捨てた。

草原の中の道がだん／＼太くなつて國道に續く所まで来た頃には日は暮れてしまつてゐた。物の輪郭が圓味を帯びずに、堅いまゝで黒ずんで行くこちんとした寒い晩秋の夜が來た。

着物は薄かつた。而して二人は餓ゑ切つてゐた。妻は氣にして時々赤坊を見た。生きてゐるのか死んでゐるのか、兎に角赤坊はいびきも立たないで首を右の肩にがくりと垂れたまゝ黙つてゐた。

てゐた。

國道の上にはさすがに人影が一人二人動いてゐた。大抵は市街地に出て一杯飲んでゐたのらしく、行違ひにしたゝか酒の香を送つてよこすものもあつた。彼れは酒の香をかぐと急にゑぐられるやうな渴きと食慾を覺えてすれ違つた男を見送つたりしたが、いま／＼しきに吐き捨てようとする唾はもう出て來なかつた。糊のやうに粘つたものが唇の合せ目をとち附けてゐた。

内地ならば庚申塚か石地蔵でもある筈の所に、眞黒になつた一丈もありさうな標宗杭が斜になつて立つてゐた。そこまで來ると干魚をやく香ひがかすかに彼れの鼻をうつたと思つた。彼れははじめて立ち停つた。瘦馬も歩いた姿勢をそのまゝにのそりと動かなくなつた。鬣と尻尾だけが風に從つてなびいた。

「何んて云ふだ農場は」
香丈の圖抜けて高い彼れは妻を見おろすやうにしてかうつぶやいた。

「松川農場たら云ふだが」
「たら云ふだ？ 白痴」

彼れは妻と言葉を交はしたのが癢にさはつた。而して馬の鼻をぐんと手綱でしごいて又歩

き出した。暗くなつた谷を距てて少し此方より高い位の平地に、忘れたやうに厩をおいてともされた市街地のかすかな灯影は、人氣のない所よりも却つて自然を淋しく見せた。彼れはその灯を見ともう一種のおびえを覺えた。人の氣配をかきつけると彼れは何んとか身づくろひをしないではゐられなかつた。自然さがその瞬間に失はれた。それを意識する事が彼れをいやが上にも佛頂面にした。「敵が眼の前に來たぞ。馬鹿な面をしてゐやがつて、尻子玉でもひつこぬかれるな」とでも云ひさうな顔で妻の方に向けて置いて、歩きながら帶をしめ直した。良人の顔附きには氣も着かない程眼を落した妻は口をだらりと開けたまゝ一切無頓着でたゞ馬の跡について歩いた。

R市街地の町端れには空屋が四軒までならんで居た。小さな窓は欄干のそのやうな眞暗な眼を往來に向けて開いてゐた。五軒目には人が住んでゐたがうごめく人影の間に闇煙の根粗袋がちよろ／＼と燃えるのが見えるだけだつた。六軒日には蹄鐵屋があつた。怪しげな煙筒からは風にこきおろされた煙の中にまじつて火花が飛び散つてゐた。店は焙煙の火口を開いたやうに明るくて、馬鹿々々しくだだつ廣い北海

道の七間道路が向側まではずきりと照らされてゐた。片側町ではあるけれども、兎に角家並みがあるだけに、強ひて方向を變へさせられた風の脚が意趣に砂を捲き上げた。砂は蹄鐵屋の前の火の光りに照りかへされて濛々と渦巻く姿を見せた。仕事場の轡の圍りには三人の男が働いてゐた。鐵砧にあたる鐵槌の音が高く響くと疲れ果てた彼れの馬さへが耳を立てなほした。彼れはこの店先きに自分の馬を引つ張つて來る時の事を思つた。妻は吸ひ取れるやうに暖かさうな火の色に見惚れてゐた。二人は妙にわくわくした心持になつた。

蹄鐵屋の先きは急に闇が濃くなつて、大抵の家はもう戸じまりをしてゐた。荒物屋を兼ねた居酒屋らしい一軒から食物の香と男女のふざけ返つた濁聲がもれる外には、眞直な家並みは廢村のやうに寒さの前にちゞこまつて、電信柱だけが、けうといと唸りを立ててゐた。彼れと馬と妻とは前の通りに押し黙つて歩いた。歩いては時折り思ひ出したやうに立ち停つた。立ち停つては又無意味らしく歩き出した。

四五町歩いたと思ふと彼等はもう町はづれに來てしまつて居た。道がへし折られたやうに曲つて、その先きは、所聞な窪地に、急な勾配

を取つて下つてゐた。彼等はその突角まで行つて又立ち停つた。遙か下の方からは、うざ／＼する程繁り合つた濁葉樹林に風の這入る音の外に、シリベシ川のかすかな水の音だけが聞こえてゐた。

一聞いて見づに「
妻は寒さに身をふるはしながらかううめいた。

「汝聞いて見べし」

いきなりそこにしやごんでしまつた彼れの聲は地の中からでも出て來たやうだつた。妻は荷をゆりあげて鼻をすゝり／＼取つて返した。一軒の家の戸を敲いて、やうやく松川農場のありかを教へてもらつた時は、彼れの姿を見分けかねる程遠くに來てゐた。大きな聲を出す事が何んとなく恐ろしかつた。恐ろしいばかりではない、聲を出す力さへなかつた。そして跛脚をひき／＼又返つて來た。

彼等は眼くなる程疲れ果てながら又三町程歩かねばならなかつた。そこに下見園、板葺の眞四角な二階建が外の家並みを壓して立つてゐた。

妻が黙つたまゝ立ち留つたので、彼れはそれが松川農場の事務所である事を知つた。ほん